
It's a small world.

秋葉茅博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I t ' s a s m a l l w o r l d .

【Nコード】

N 9 8 5 7 Y

【作者名】

秋葉茅博

【あらすじ】

時空間移動が可能になった遠い未来の世界。

それは資源に乏しくなった遠い未来の世界。

そんな未来の世界で別時空から資源を送り込むプロジェクト「旅人」が発足した。

時空間移動でわかっていることは、

大人が時空間移動することは不可能。

子供が時空間移動することは可能。

などがあった。

そんな「旅人」に立候補した、時空間移動技術の開発者の息子、神城京介は移動装置に乗り時空間移動するが、システムトラブルがありある時空に緊急侵入する。

その時空はなんと…子供だけの世界だった。

エピソード＋A c t 1

西暦20XX年

人類は時空間移動を可能にさせた。

しかし時空間移動は子供だけが肉体、精神に負荷がない状態で移動できる。

しかしこのとき地球は、鉱石、燃料などの自然資源が足りなく、移動装置をあと一機しか作れなくなってしまった、その時。

開発者の息子が時空間移動の「旅人」^{トラベラー}に立候補した。

そんな開発者の息子、

神城 京介は、ある移動装置の中にいた。

A c t 1. かわいい子には”旅”をさせよ。

（移動装置内）

？ 「『旅人』^{トラベラー} 脈拍安定、脳波安定、時空間移動に支障無し！」

神城父「京介、この計画は資源が少なくなったこの星を救う最後の計画だ。いくらお前が志願したからには、必ず資源がある時空を見つけ、情報を送ってくるんだ。」

神城「ああ、分かってる、必ず見つけ出す。じゃあいつてくるよ。」

そう言うと、移動装置ゆりかこの扉が静かに閉まる。

？「時空間移動開始します。衝撃に備えてください。開始10秒前」
研究員アナウンスがカウントを始めると移動装置ゆりかこが浮かびだす。

神城「さて、俺はこれからどこの時空に行くんだろうな。。。」「

その言葉を言い終わると同時に移動装置ゆりかこがまばゆい光と震動と共に消えた。

神城は、この時空から消えた。

（時空間内）

神城「ここが時空。。。何も見えない。」

のぞき窓からは、暗闇しか見えない

神城「さて、着くまで寝るか」

その時、移動装置ゆりかこがアナウンスを始めた。

？「時空間の歪みが発生しています。安全のために時空に強制侵入します。衝撃に備えてください。繰り返します…」

神城「おいおい、まじかよ。こんな事聞いてねえよ！…くそ！操作も効かねえ！」

移動装置ゆりかこはそのまま時空に入っていた。

（研究室）

？「おや？これは…ふむ、迷子のようにすな。。。」

そう言う白衣の男は電話を持ち上げ

？「ああ、回収班か…そうだ。迷子を回収して街まで送ってくれ。そうだな。ここの説明もしてやってくれ。では」

そういうと電話を机の上に置いた。

？「いままでの迷子とは違う…面白い事になりそうだ。」

（現在地不明）

神城「…」

神城は気絶していた。

20メートルまで耐えられる移動装置ゆりかこの壁は大破していた。

？「あれが迷子か。。。やはり今回も子供か。よし車に乗せるぞ！あとその機械は大統領の研究所まで持っていけ！」

？「ジャック大佐！迷子は気絶！頭部からの出血が激しいです！」

ジャック「分かった！応急処置だけ済ましとけ！こちら回収班、座標アルファ56889に治療班をよこしてくれ！」

治療班「了解、あと5分でそちらに着きます」

ジャック「了解した」

ジャックは運ばれている＜移動装置＞（ゆりかご）を見ながらつぶやいた

ジャック「やはりこの世界は子供だけしか来れないのか」そんな彼もまた16歳の子供であった。

A c t 1 終

Act 2

Act 2. 子供だけの世界

（病院）

神城「・・・」

神城の指には小型心拍数測定値がつかね頭はネットのようなもので覆われていた。

ジャック「ふむ。やはりジャポネ系の顔か。あの方もジャポネ系だったな。」

浮遊イスに腰掛け神城の顔を見ながら呟いた。

ジャック「それにしてもこいつは他の奴と違って乗り物に乗った状態でここに来た。前代未聞だ。」

ブルルブルル

端末が震えている。

ジャックは部屋を出て端末を取り出した。

ジャック「こちらジャック。」

？「迷子の子は？」

ジャック「これはキシマ大統領、命に別条はありませんが、どうやらジャポネ系の者の様ですな」

キシマ「ふむ。ジャポネ系か、ジャポネというと私もその分類に入るようだな。ふむ実に興味が湧いてきた。迷子が起き次第こっちに連れてきてくれ、ではまた。」

ジャック「了解です大統領。」

端末をしまい部屋に戻ると神城は目を覚ましていた。

ジャック「目を覚ましたか新入り」

神城「誰だ？そしてここはどこだ？あの乗り物は？」

神城は動揺しながらジャックの肩を掴み今おかれてる状況を理解しようとしていた。

心拍数が上がっていた。

ジャック「俺は陸軍大統領直属部隊のジャック大佐だ。呼び名はジャックで構わない。」

神城「大佐？ここはどこだ？」

ジャック「まあ、落ち着け、ここは一応ターミナルと呼ばれる星でダインというこの星唯一の国だ。」

神城「ターミナル。。。あの乗り物は？」

ジャック「あの乗り物？ 君はあれに乗ってきたのに名前を知らないのか？」

神城「ああ。何かに乗っていたんだが墜落したまでは覚えているんだがそれより前のことが思い出せないんだ。。。」「

神城は頭を強打したことで記憶を失っていた。

ジャック「記憶喪失か。。。君、名前はわかるか？」

神城「神城京介だ。16歳」

ジャック「ふむ。自分のことについては分かるようだな。歩けるか？ これからあるところに向かう」

神城「ああ歩けるがどこに行くんだ？」

ジャック「大統領に会わせる。大統領直々の命令だ。この世界に關することを君に教えるようにも言われている。それは移動しながらにしよう」

神城「ああ。わかった。」

ジャック「ついてきてくれ。」

神城とジャックは部屋を出て部屋の入り口にいた兵士と共に屋上飛行ユニット着陸場に向かって行った。

（屋上飛行ユニット着陸場）

神城「ヘリコプター？のようだけどこれは一体。。。」

ジャック「ヘリこぷたー？なんだ？これは輸送型飛行ユニットだが。
。。。」

ジャックは飛行ユニットの扉を開き神城もそれに続き中に入って行った。

ジャック「まあ、かけてくれ。」

神城「あ、ああ。」

飛行ユニットはゆっくりと離陸した。

ジャック「さて君にはこの世界について説明していく。」

神城「ああ。わかった。」

ジャック「実はここに住んでる国民は全て子供で元々この世界の住人ではなく別世界の住人だった。」

神城「別世界に住んでいた子供がここにいてることか？」

ジャック「まあ簡単に言えばそうだ。そういえば歳をいってなかったな。俺は16歳だ。」

神城「同い年か。ここにはどれぐらいの歳の子供が住んでるんだ？」

ジャック「今のところ0歳から18歳まで確認している。」

神城「そんなにちいさな子供までいるのか。そういえば別の世界からここに来ているのに言語の壁は無いんだな。」

ジャック「実は最初この世界には7人しかいなかった。そのときまだ言語の壁はあったんだ。だかなその中の一人がこの世界に来たときに研究室一個まるごとこっちに來たらしく開発環境がそろっていたらしい。そのときに残りの六人の脳内からあらゆる情報をデータ化してそれぞれの言語をそれぞれに理解出来るようにごく小さな翻訳機を作った。いま国民全員の両耳に埋め込まれている。」

神城「すごいなそりゃ。」

ジャック「ああ。そして彼ら7人は協力しあい次々にくる子供たちと共にこの国を作った。そしてその7人はこの国の大統領なのさ。」

神城「7人も大統領がいるのか。」

ジャック「それぞれ担当する分野が分かれていて、技術分野、軍事分野、生活分野、農林水産分野、経済分野、治安分野、交通分野の七つに分かれている」

神城「ふむ。この星には全部で何人くらいの人がいるんだ？」

ジャック「いまは8000万人ぐらいといったところだな。」

神城「そんなにいるのか。」

ジャック「いまは落ち着いて一ヶ月2人ぐらいだ。いままでの奴らは自力でこの街にきて人に助けを借りて住人になるが乗り物に乗って気絶した状態なのはお前が始めてだ。」

神城「そうか・・・」

ジャック「ま、しばらくはお前の世話係だろうからわからないことがあったら連絡してくれ。これがお前の通信端末だ。」

そういうとジャックは懐から小型の機械を取り出した。

ジャック「これは使用者の脳波を捉えて使用者の思う様に動かせる代物でな、端末がない世界の奴からでも通話等の連絡手段についておしえてやれば簡単に通話出来る。お前の世界には端末はあったか？」

神城「ああ。あった。なぜかそれはわかる。」

ジャック「ふむ。あの乗り物についてわからず端末はわかる。知識でも抜けてる部分と抜けてない部分があるようだな。」

神城「そうみたいだ。」

ジャック「さてそろそろ大統領会議館に着く。迷子でも大統領に呼ばれるのはお前が初めてだ。」

神城「それだけ俺は普通じゃないのか。」

ジャック「脳内総合能力診断（B・T・S・T）によると神城は戦闘力、知識指数、判断力がAランクにある。5大情報の内戦闘力含めAランクが二つ以上三つ以下の人間は大統領直属部隊に入れられる。だからでもあるな。」

神城「三つ以上の奴らはどこにはいるんだ？」

ジャック「ダイン軍の陸海空軍の第零部隊に入れられる。いまは5人しかないが、シュミレーションの結果だと、零部隊だけで星一つ占拠出来るほどの力を持っている。通称スケアリーと言われている。」

神城「恐れ、か。反逆されたら終わりじゃないか？」

ジャック「その部隊の隊員の内二人は大統領だ。軍事担当と治安担当の二人だ。」

神城「なるほど。」

パイロット「大佐、着陸します。」

ジャック「わかった。神城おりるぞ」

神城「ああ。」

神城とジャックは飛行ユニットから降り巨大な建物へ歩いて行った。

A c t 2 終

Act 3

Act 3. この世界の小さき責任者

（大統領会議館内）

ジャック「ここがこの世界の最前線大統領会議館だ。」

二人は丁寧に磨かれた石の廊下を歩いていた。

子供の政治家、秘書が忙しく歩いていた。

神城「それにしてもここにこの服装は場違いすぎないか？」

神城は病人が着る質素な服をみにまもっていたままだった。

ジャック「この先に大統領直属部隊専用の棟がある。そこに神城用の服、支給金、支給された家の鍵等を手配してある。そこで着替えるんだ。」

神城「ああ。わかった。」

二人は大統領直属部隊兵舎へと歩いていった。

（大統領直属部隊兵舎）

大統領会議館とかわらない綺麗な兵舎に二人は足を踏み入れた。

中にいた他の隊員達が神城を見ている。

神城「広いな…」

神城はつぶやいた。

ジャック「お前の部屋は六階だ。そのエレベーターでいくぞ。」

二人はエレベーターに乗り6のボタンを押した。

神城「この文字は…」

ジャック「？ダイン語ならキリシマ大統領が考案した国民データを元にして作った国民がもつとも覚えやすい言語だが？みたことがあるのか？」

神城「俺のいたとこの言葉だ。」

ジャック「ふむ。おもしろいな。さて六階だ。」

「神城の部屋」

シャワー室。ベット。テレビ。キーボード付き端末。などがついている2LDの部屋だった。

神城「キッチンは無いなだな。」

ジャック「二階にビュッフェがある。兵士は無料で利用できる。」

神城「無料か。この国の通貨はないのか？」

ジャック「通貨はある、エルーだ。記号はLの縦線に横棒一本で書く。ちなみに100エルー均一で生活用品はほとんど買える。」

神城「物価は高くないんだな。」

ジャック「じゃあ着替えてくれ。それと拳銃は勤務時間、休暇、いかなるときも常備するのがダイン軍の規則だ。拳銃は後でもらえるだろう。準備が終わり次第外に来てくれ。俺は兵舎入り口で待っている。」

神城「わかった。」

ジャックはその言葉を聞くと神城の部屋を出ていった。

神城は服を脱ぎベッドの上に置いてあった服を着た。

神城「これは？所属部隊のバッチか？そーいやジャックの襟につけてたな。」

ジャックはピンバッチを襟につけた。そしてふと鏡に映った自分を見た。

神城「悪くない軍服だな。」

神城は支給金と書かれた紙に書いてあるコードを端末でスキャンした。ジャックに聞いたところによると貨幣等はなく全て電子貨幣になっているらしい。

端末に表示された金額を目にして神城は驚いた。

神城「きゅ、900万エルー…こんなに貰えるのか？いや、きつと娯楽とかの費用が高いんだ。」

初めて見た自分の所持金に通貨の価値が分からなくとも万の金額に興奮が抑えられない神城であった。

〃 大統領会議館内〃

ジャックと合流した神城は大統領会議館に入っていた。

神城「ジャック、一つきいていいか？」

ジャック「なんだ？恋愛関係ならお断りだ。」

神城「始めてもらったときの支給金はいくらだ？」

ジャック「ひとに聞く前に自分の金額をいうだろう普通は」

ジャックは笑いながらそういった。

ジャック「で？神城はいくら貰ったんだ？」

神城「900万エルー。」

ジャック「き、き、きゅ、900万エルー！？？」

ジャックは周囲の視線に気づき咳払いした。

ジャック「900万エルーなんて支給金貰った奴は初めて見た。せいぜい多くて200万エルーだぞ？900万エルーなんていったら

一級装備、いや最新兵器、秘書、自家用飛行ユニット、自家用車。ぜんぶ買ってもしばらくは生活困らないぞ?」

神城「…」

神城は空いた口が塞がらなかった。

ジャック「まずは装備を一通り揃えた方がいいな。大統領の挨拶が終わったら研究所に行け、オーダーメイド装備、防具、もろもろ揃えた方がいい。」

神城は頷くとそのままジャックと共に大統領室に向かっていった。

〳大統領室前〵

ジャック「入ったらまず所属部隊と名前を言って自己紹介するんだ。そしたら後は大統領から何か言われると思う。頑張れよ。」

神城「わかった。言ってくる」

神城は大統領室の扉を叩き入っていった。

〳大統領室内〵

神城「大統領直属部隊、神城京介です。」

大統領室には七人の子供が入り口を囲むように座っていた。

キシマ「まっていたよ神城くん。私が技術分野担当のキシマだ。」

？「あらあら、可愛い顔してるのね神城くん。はじめまして、私が生活分野担当のアンジェよ。」

？「アンジェ、イケメンだからって色目使わない！私が治安担当のミーシャだ」

？「ミーシャかわいいなあ…僕が経済分野のルッソリーニだよ」

？「交通分野のリーだ。楽にしてくれて構わんぞ」

？「農林水産担当のサニーだー！ねえトマトの様子見てきていい？」

？「軍事担当のケビンだ。貴殿の噂はかねがね聞いているが本当なのだろうな？」

大統領室の空気は軽かった。神城は安堵した。

神城「え、えーっと…」

キリシマ「そうだケビン大統領。神城くんの階級を教えていないのかな？」

ケビン「一応能力的には少佐だな。貴殿はこれより神城少佐だ。国の平和の為存分に力を発揮してくれたまえ。」

ミーシャ「あなたはこれから三日間この国を知ってもらうのも兼ねて治安部隊に臨時入隊してもらいます。しばらくは私の指示に従って動いてください。明日の〇八〇〇までには端末に指令を送つとくのでその時間までには準備を整えておいてください。服装はのちほ

ど貴方の自室に送ります。装備は兵舎の武装販売所もしくはわ研究所の武器兵器開発室に 부탁드립니다。まあ研究所の方は比較的高いので兵舎のほうでいいと思いますが。」

キリシマ「ああ金銭のことなら私が900万エルー送つといてるのを確認してと思うから私のラボに來なさい。同じジャポネとして無償で武器兵器は作ってあげよう。」

ケビン「これで一人で一個中隊の戦闘力になるがどれほど装備が良くても所詮テクニクが物を言う。兵舎のシミュレーションでもやっておくように神城少佐。」

アンジェ「あらあらテクニクなんてなんだか卑猥ね」

ミーシャ「破廉恥なこといわないの!」

ルッソリーニ「恥じらいながら注意するミーシャかわいいなあ…」

リー「おいおい少佐殿が呆然としているぞ!ガッハッハってサニーはどこにいった?」

神城「サニー大統領なら出て行きましたが…」

アンジェ「あらあらお野菜の様子でも見にいったのでしょうか。男の子は元気ねえ」

キリシマ「さてでは一通り終わったことですしお開きにしましょうか。ミーシャさんと神城くんはこの後私とラボに行きましょう。」

神城「分かりました。」

ミーシャ「説明することもあるしね。」

キリシマ「では行こうか。」

Act 2 終

Act 3 小さな責任者の大きな悩み

（キリシマラボ内）

ミーシャ「相変わらず白ばっかね。」

キリシマ「白が落ち着くのだよミーシャくん。さて。これから君の脳内情報、身体測定結果を元に防具、武器、アタッチメントを製作する。その後に射撃訓練と行こう。」

神城「わかりました。」

ミーシャ「完成するまでこの三日間の概要を説明するわ。まず明日は密林警備。明後日は組織アジト搜索。明々後日は不良組織の武器密売取引場の取り押さえになっている。私は明々後日同行する。」

神城「結構ハードなんですネ…」

キリシマ「ジャックくんの際は三日間連続で張り込みだったね。」

ミーシャ「最近不良組織の活動が活発でね。軍部を軍法違反で退役した軍人が不良組織を形成して軍部や街にテロ攻撃を行っててね。最大のヤマで過去最高の動員数でやるつもりよ。明々後日ダイナン

部の廃工場で密売があるのを潜入してる工作員から聞いてね。80名で叩くつもりよ。」

神城「なるほど…」

ミーシャ「もちろん射殺前提よ。死者だってでてるんですもの。」

神城「同い年の奴を殺すのか。想像できません。」

ミーシャ「でもそいつらを殺さない限り犠牲者は増えるの。いくら逮捕しても無駄。」

神城「…」

キリシマ「まず君の拳銃を渡しておこう。君が入院中に作っておいたんだ。反動を極限まで抑えて近距離で打撃戦として使えるように合金で固めてあるから少し重いが君の筋力なら問題ないだろう。」

神城「これが俺の拳銃…」

ずっしりとした銃の重みはまるで責任のおもさを感じさせていた。

キリシマ「これはおもちやではないことをわかって欲しい。君がその引鉄を引けばその銃口の先にあるものに風穴が空く。」

神城は息を吞んだ。自分の今の状況に、今この手にあるバケモノに。

ミーシャ「まあ気にすることはないわ。」

キリシマ「全ての銃は私の開発した国民総合データベースによって

銃口に向けた相手がA級犯罪者もしくは追放者と認定された者でない
と銃弾は出ない。」

神城「しかし不良組織は武器の密売をしようとしてるではないですか。」

キリシマ「彼らの中にはこのシステムを開発した仲間がいて脅迫されてクラッキングを行ってるんだ。」

神城「卑劣な奴らだ。」

ミーシャ「そのためにもあなたの協力が必要な。ダイン建国以来
史上最悪の出来事がこの三日間で解決するはず。もちろん射殺前提。」

神城「射殺は外せないんですね。」

ミーシャ「まあいいわ。まだ新兵のうちに言っておくけど自分の身
は自分で守りなさい。任務中にチームメイトを助けようとして死んで
行った治安部隊員を何人も見て来た。法律だけでは命は救えない。
取り締まる人がいないと法律はなんの意味もないの。」

キリシマ「水を差すようで悪いがアサルトライフル、スナイパー
イフルの原型は大体完成した。後はアタッチメントの希望を言って
くれればと思ったが三日後の任務に適したアタッチメントを作っ
ておいてあるからまずはそれを使用して欲しい。」

ミーシャ「あら、私には作ってくれなかったのにね。」

キリシマ「君はもはや銃の性能云々の問題を難なく超えてるからね。」

」

ミーシャ「言ってくれるじゃない」

微笑みながら言った

キシマ「ではその拳銃は常に携帯しなさい。それと明日からの任務にはこの腕輪を装備しなさい。」

それは白い腕輪にいくつかスイッチが付いたシンプルなものだった。

神城「これは？」

キシマ「私が最近開発した武器転送リング試作型だ。自室の武器庫から二個武器を設定して任務中いつでもどこでも武器を転送できるというものだ。」

ミーシャ「また大層なもの作ったわね」

キシマ「なにまだ試作型だ。」

神城「実験も兼ねてということですが。」

キシマ「そういうことになるな」

微笑みながら言った。

ミーシャ「では明日は0800までに端末に集合場所、時刻を送るから体を休めなさい。準備は怠らない様に。」

キリシマ「ではこれがアサルトライフル、これがスナイパーライフルだ。自室の武器庫にいけないと腕輪はただのアクセサリーになってしまふから気をつける様に。すでにマガジン五つに弾は込めてあるが足りなければ同じ治安部隊にもらうんだ。」

二つのアタッシュケースを受け取った。

神城「わかりました。では失礼します。」

神城は拳銃を腰に収め両手でアタッシュケースを持ち研究室をあとにした。

ミーシャ「では私も失礼するわ。」

キリシマ「すでに無人偵察機、無人攻撃機の操縦端末と機体のメンテナンスは終わってある。」

ミーシャ「いつも助かるわ。今度何かおごるわね」

キリシマ「ならコーヒー豆を所望するよ」

ミーシャ「ふふふ、わかったわ」

ミーシャは研究室を後にした。

キリシマ「さて、次の計画書は…戦闘機開発か…」

Act 3 終

Act 4

Act 4 初任務前日

（ 神城の部屋 ）

神城「そういえばシミュレーションルームで射撃訓練をやって言われてたな…やるか」

武器を武器庫に入れ終わると自室のシミュレーションルームに入った。

アナウンス「シミュレーションルームへようこそここではあなたの武器の性能、あなたの能力を測定出来ます。武器庫にある武器のデータを使用します。モードを選んで下さい」

神城はターゲットシューティングを選ぶと部屋全体に立体ホログラムが展開した。

アナウンス「三十秒間に多くの的の急所を狙ってください」

アナウンスが終わると目の前でカウントが始まった。

アナウンス「3、2、1、スタート」

目の前に出てくる的の頭を狙い引き金をひいていった。

10、20、とスコアが伸びていく。

やがてビーという音とともに立体ホログラムが消えて行った。

アナウンス「あなたの得点は860点です。ランクはA+です。武器の能力はあなたにとってもマッチしているようです。シミュレーションお疲れさまでした。」

神城「射的はできるんだな俺。」

神城自身とても驚愕している。

ぎゅるるる…

神城「そういえば何も食ってないな。」

神城は腹が減っていることに気づきビュツフェに行った。

く兵舎内ビュツフェく

飯時なのだろうか、50人余りの隊員がビュツフェに集まっていた。

？「おーい神城こっちだ！」

聞き覚えのある声が神城の耳に入った。

神城「ジャックじゃないか！」

ジャックは他の隊員達と場所を取っていた。

ジャック「神城もこれから飯か、初めてなんだろう？俺がオススメを取ってきてやる！」

神城「ありがとう。」

ジャック「気にすんな。お前の世話係だからな。」

そういうとジャックは席を立ちフードコーナーへ向かっていった。

？「お前が新入りか？なかなか様にじゃないか。」

隣に座っていた青年が話しかける。

神城「ど、どうも」

斜め前の男「噂によると支給金が前代未聞の900万エルーだと聞いたがその銃を見れば一目瞭然だな。」

隣の男「出ました。工兵エドの銃査定。」

エドと言われたその男は室内だというのにサングラスをかけていた。

エド「これに使われている合金は見たことない。恐らく研究所の最新作だろう。違うかな？」

神城「ギリシマ大統領が作ってくれたんだ。」

隣の男「新兵の銃を大統領が作るとかどんだけ見込みあるんだよ。こりゃ相当な戦力と見た。」

エド「タクミは最初安物のグロックだったもんな。」

タクミ「しかし今は金を稼ぎ遂に新型のベレッタ！嬉しい限りだ。」

エド「ま、ベレッタなんてもう旧式になりつつあるけどな。」

タクミ「そうだ新入り、俺はタクミ、階級は中尉、衛生兵をやってる。お前の頭の怪我応急処置したの俺だからな、感謝しやがれ！」

そういうとタクミはニヤリとた。

エド「俺はエド、階級は中尉、工兵やってる。」

エドは無表情でそう言った。

神城「俺は神城、階級は少佐らしい。」

そういうとタクミはニヤリとした顔から真顔になった。

タクミ「上官でありましたか！！タメ口使っちゃったよエド！」

エド「俺らが先輩なのに俺らよりも上官だなんてややこしいな。」

タクミはビックリした表情で、エドは無表情でいた。

神城「ここの生活に慣れていないからタメ口でいいそっちの方がありがたい」

タクミ「そ、そうか。わかった。」

エド「ま、俺らも大佐にはたまにタメ口だしな。」

タクミ「自然とそうなっちまうからなあ」

神城「二人はジャックとどういう関係なんだ？」

エド「俺らは回収班の班員で大佐は班長なんだ。あ、回収班というのは大佐から聞いたかもしれないがこの世界に子供が来たときにそいつを回収しにいく活動をする。」

タクミ「まあ自力で町にくる奴も珍しくないから遠い所でなおかつ大統領から命令があった時だけ出動する」

神城「俺の所属班は回収班なのか？」

エド「それは神城自身が決めれる。ここの部隊は戦闘を主としているけど各自がさまざまな仕事をするんだ。回収班の他に治療班、特殊警備班、偵察班の四つに分かれている。」

タクミ「その中で一つの班に入るんだ。まあ最近楽なのは回収班だけどな。」

神城「ふむふむ。そういえばここの部隊の隊員は何人なんだ？」

エド「百人ぐらいだったような：一つの活動班に20人前後だったな。一番少ないのは回収班で15人。みんな他の班に流れて行ったよ。」

タクミ「迷子全盛期は半分ぐらいが回収班だったのにな。」

エド「まあ回収班が居心地がいいから残ってる奴も多くはない。」

ジャック「そうか、そう思ってくれてるのなら班長として嬉しいな。」

タクミ、エド「大佐！」

神城「余程ジャックは人望があるんだな。」

ジャック「んなことを気にした覚えがないな。」

タクミ「大佐には新入り時代教育係でお世話になったつす。」

エド「その恩は忘れられないです。大佐。」

ジャック「んなことあ気にしないでいいのにな。ほれ神城、明日の為に力つけとけ。」

いかにもスタミナが付きそうな料理が神城の前に出された。神城の食欲を匂いがそそる。

神城「ありがとうございます。いただきます。」

神城はむしゃむしゃと食べ始めた。

エド「そうか明日から神城は治安部隊に入って実戦か。」

ジャック「ああ、なんでも明日は密林警備らしいからな。スタミナをつけとけ。」

タクミ「密林か、俺はテント待機だったから楽な思い出しかないなあ。」

神城「ごちそうさま」

全員「「はやつ!」「」」

神城「そうか?」

この間わずか数分足らずであった。

ゝ 二〇三〇…自室ゝ

あの後数十分談笑した神城は自室に戻りシャワーに入った。

シャワーから上がりベットに腰掛ける。

ブルルブルルル

端末が震えた。

表示名はミーシャ

神城「（任務連絡か…予定よりも早いな）」

端末を持ちメッセージを開く。

すると端末から音声聞こえた。

ミーシャの声だ。

ミーシャ『明日の0830に兵舎西の治安部隊本部内車両倉庫に集合各自装備を揃えるように。0830よりブリーフィング開始、終了次第活動班ごとに運搬車両に搭乗し密林地帯へ向かいます。なおこのメッセージは機密保持、テロ防止のため自動削除されます。各々また明日会いましょう。なお本作戦は大統領直属部隊より一名派遣されます。では。』

すると端末画面に削除中の表示がされた。

削除完了の画面を確認すると端末をベッドのそばに置いた。

神城「（よし弾込めて寝るか…）」

武器庫へ向かう前に腕輪の事を思い出した。

神城「試してみるか」

神城は腕輪のボタンを押すと腕輪を装着していた左手にグリップ部分から武器が現れた。途端に腕が重力の法則に則り地面に引っ張られた。

神城「これはすごい…」

手はアサルトライフルをしっかりと握りしめていた。

神城は端末でマガジン装填の仕方を表示し弾を込めはじめた。

自分の知識にある形の弾薬でフルメタルジャケット仕様になっている。

神城「（俺はどうしてここに來たのだろう。）」

神城は不思議に思っていた。

あの乗り物の事、自分の過去、そして墜落する時までの記憶。

全てが謎だ。

もどかしく悶々とした気持ちになる。

気づくとアサルトライフルの空きのマガジンが一個も無くなっていた。

神城「（次はスナイパーライフルか。）」

黒が基調となっている機能的フォルムのアサルトライフルを握り締める。

ほんのり冷さを感じる。

腕輪のボタンを押すとアサルトライフルが光に包まれスナイパーライフルが姿を現す。

マガジンを抜き弾をいれマガジンを二個上下逆さまにくつつける。

神城「（なぜこんな知識を知ってるんだ俺は。）」

知識だとこの方がリロード速度が早くなることを知っていた。

こうして全てのマガジンに弾を込め二個ずつ上下逆さまに束ねまと

める。

神城「このまま記憶が戻らないまま、ここにいることになるんだろうか。」

先ほどジャックにベットそばにあるパネルでチョッキやベストが出せることを聞きパネルをタッチする。

ミーシャには治安部隊の統一装備を登録してもらっている。

防弾チョッキ、ベスト、服、ヘルメット、サポーターがパネルが置いてあった机に出て来た。

ベストにマガジン、手榴弾、フラッシュバンをしまう。

そして机に置く。

神城「もう10時か。」

すっかり夜も更けて来た。

神城はベットに寝転んだ。

神城「（俺は誰なんだ。）」

初日でバタバタしたためかスーッと眠ってしまった。

Act 4 終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9857y/>

It's a small world.

2011年12月3日19時23分発行